

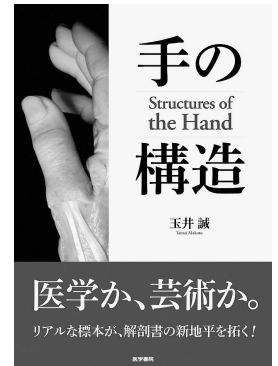
手の構造 Structures of the Hand

玉井 誠・著

評者 水関隆也

(広島県総合リハビリテーションセンター名誉所長)

B5判・232頁
2024年4月
定価：16,500円
(本体15,000円＋税10%)
ISBN978-4-260-05475-1
医学書院 刊



「何だこの本は？」誰もがこの本を手にとると感じるに違いない第一印象。本書の帯に「医学か、芸術か。」とある。興味津々、本書を開いてみると、1ページ目から人の手の皮膚を剥いだモノクロ写真が飛び込んでくる。手外科を生業にしているわれわれには見慣れた画像ではあるが、機能的に配置された手指の構築物をあらためて俯瞰すると、それは確かに芸術作品にも見えてくる。

解剖経験者であれば容易に想像できるが、一見簡単そうに見える解剖写真の見栄えを整えることはそう簡単ではない。著者が序章で書いているようにホルマリン防腐処理を受けた屍体は変質して、とても観賞に耐える写真はつくりえない。冷凍屍体は時間とともに乾燥して新鮮さを失う。実際の手術時の所見に近づけるため、著者は繰り返し水に浸し標本の湿気を維持している。この段階ですでに標本作成の苦労は想像に難くない。仮に標本の保存がうまく行われたとしても、解剖を進める際に組織を間違えて切りつけたり、切除したりしてしまうような標本ができないと最初から解剖をやり直すはめになる。標本が完成したら次なる課題は写真撮影である。本書には、写真家としても知られる著者であればこそ撮影できる写真が随所に見られる。素晴らしいクオリティの写真である。

外科医として手術に臨むとき、術野をイメージする際に参考にするのが種々のアトラスで描かれている図譜であるが、この図譜が必ずしも当てにならない。多くの図譜がメディカルイラストレー

ターによる描画であるため、外科医が必要としている神経、筋、腱、関節などの位置関係が必ずしも正確に描かれているとは限らないからである。その点、本書に掲載されているのはすべて“生の写真”であるため、アトラス図譜のように編集者による意図的な組織の変形、修飾が入り込む余地がない。手外科専門医あるいは研修医の術前の手術イメージ、シミュレーションにはうってつけの書である。

一方、著者の思い入れが余って詳細に過ぎる記述が読者を混乱させる箇所もみられる。手関節の尺側解剖の項である。同部の解剖は複雑で、以前より報告者によりさまざまな解釈がなされており、いまでも意見の一致をみていない。はっきりしている事実は手根骨と尺骨頭の間に存在する関節円板があり、これを取り囲むように橈尺靱帯、尺側側副靱帯、その表層に尺側伸筋腱鞘床が存在し、それぞれの組織の境界は鮮明ではない、ということである。臨床の現場では同部位の組織を三角線維軟骨複合体(Triangular fibrocartilage complex; TFCC)と総称して混乱を避けている。著者はTFCCという言葉を取って一切用いず、一個ずつの線維束に呼称を与えている。著者の解剖にかけた執念が垣間見られる。

本書は、手の解剖図譜として手の細部の構造を一見にして理解できる「医学書」と、手の審美性と機能性をレンズを通して解説した「美術書」の両方を兼ね備えた書ではなかろうか。